本学競技者に関する研究（1）
―日本女子競技者および本学競技者の総合国際競技大会への参加拡大傾向について―

掛水通子　阿江美恵子　雨ヶ崎俊子

はじめに

1902（明治35）年にわが国初の女子のための体操学校として設立された本学は、選手養成ではなく体育教員養成を主眼として来た。特に、1908（明治41）年から1955（昭和30）年まで、第四代目の設立者・校長を勤めた藤村トヨは対外試合の出場を規制していた。こうしたことから、これまで、学園史の編纂の時なども、学生や卒業生について競技者の視点から述べられることはなかった。

しかし、本学も世界および日本の女子スポーツの発展と共に歩んで来たことから、本学教育課程外での主として運動部活動の成果として国内のみならず国際競技大会に参加する学生、卒業生が徐々に増えてきた。また、1994（平成6）年度入学生からの新教育課程では、従来の三年次からの「学校体育」、「社会体育」専攻から六コース制と改められ、その一つに「競技スポーツ」コースを設け、本年（1996年）4月に初の三年生の課程が始動することになる。こうしたなかで、われわれはこれまで報告されて来なかった、競技者をめぐっての諸問題に関する研究に着手し、手始めに、これまでの競技会参加の実態を探った。

本研究では、そのなかから総合国際競技大会（オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会）への日本女子競技者と本学競技者の参加拡大傾向について報告する。

研究対象は公式報告書に選手として報告された者とした。本学競技者とは東京女子体育大学、同短期大学とその前身校[1)]の学生と卒業生で競技会に選手として参加したものとし、本学入学以前の参加者[2)]や本学卒業生以外の本学教員は除外した。本研究では日本女子競技者の参加の途が拡大した過程を明らかにし、本学競技者がこれらの大会にいつから参加し始め、どのように参加競技数を増やして来たかを探るのみにとどめ、全成績については、本紀要中に世界選手権大会の成績をも加えた、「本学競技者に関する研究（2）―主要国際競技大会出場者とその成績（1954-95年）について―」で報告する。

史料として本学学生部所蔵史料、本学後援会発行「学園便り」全号、日本体育協会および日本オリンピック委員会発行書および各大会報告書、各スポーツ団体所蔵史料、各競技者所蔵史料、女子スポーツ関係書等を用いた。

日本女子競技者の各大会参加の実態については、日本体育協会や、日本オリンピック委員会から各大会ごとに報告されている。全体の傾向についても『日本体育協会七十五年史』等で男女や日本の参加不参加等が同時に一覧表にまとめられているが、日本女子競技者の参加拡大傾向は捉えにくい。それらの一覧表を参考にし、本研究では日本女子競技者の参加の観点から新たな一覧表を作成した。本学競技者についてはこれまでに報告されていないので、本研究は意義あるものとなろう。

Ⅰ　オリンピック競技大会における日本女子競技者および本学競技者の参加拡大傾向

1　日本女子競技者の参加拡大傾向

(1)夏季大会

① 日本女子競技者参加以前

1896年に再興された近代オリンピック競技大会は、本年百周年を迎える。周知のように、古代オリンピックにおいては女子の参加は許されておらず、近代オリンピック競技大会の女子の参加は1900年の第2回パリ大会からである。日本男子競技者は第5回ストックホルム大会に初出場を果たしていたが、日本女子競技者の参加は1928年の第9回アムステルダム大会からであった。

表１に日本女子競技者と本学競技者の参加拡大の状況を分かりやすく示した。○はオリンピック女子競技を、□は男女の区別ない競技を、◎は日本女子が参加した競技を、回は男女の区別ない競技に日本女子が参加した競技を、◉の中心が黒く塗ってあるものは日本女子が参加した競技中、本学競技者も参加している競技を示す。さらに、「は男子競技の開始、再開を、『は日本男子競技者の参加開始を、『『は男子競技の開始と日本男子競技者の参加開始が同時であることを示す。これによって、女子競技と男子競技の開始の差を捉えることができる。この表は、まだ日本女子競技者が参加していないホッケー、現在は実施していないゴルフ、冬季大会に移行したフィギュアスケートを除いて、日本女子競技者が初出場を果たした競技順に左から右へ並んでいる。日本女子競技者が参加する以前は表に見られるテニス、アーチェリー、水泳、ヨット（男女の区別なし）、フェンシングに加えてゴルフ（第2,3回大会のみの実施）、フィギュアスケート（第4,7回大会に実施し後に冬季競技に移行）に女子競技者が断続的に参加していた。男子の参加できる競技数は15から23であったが、女子は第7回大会までは2から3競技で第8回大会に4競技となっている。その時までに、女子が最も多く参加していたテニスは男女とも第9回大会から実施競技からはずれ、第24回大会に復活する。初期に実施されていた、これらの競技は当時の女子の服装、女性観から許された美的なものや静的なものとみなすことができる。

② 日本女子競技者初の１競技参加と２競技参加時代

（1928年第9回アムステルダム大会ー1952年第15回ヘルシンキ大会）

1928年の第9回アムステルダム大会は世界の女子競技者にとっても日本の女子競技者にとっても大きな意味を持つ大会であった。

この大会に陸上競技と体操が加わった。とりわけ陸上競技への参加は女子の願いであった。古代オリンピックの中心競技は、今日の陸上競技であったから、これに参加することが真の意味での参加になるのである。フランスのミリア夫人は女子も陸上競技ができることを、1922年にパリでの第1回、1926年にエテボリーでの第2回の世界女子オリンピック大会を成功させて証明した。このことによって陸上競技が加わったのである。女子が参加できる競技は第9回大会から1936年の第11回大会まで水泳、フェンシング、陸上競技、体操および男女を区別しないヨットを加えた5競技、第12、第13回大会は戦争のため中止、1948年の第14回大会にカヌーが加わり6競技に、1952年の第15回大会に男女を区別しない馬術が加わり7競技となる。

唯一人での日本女子の初参加者は第9回大会で加わった陸上競技への参加であった。今日においても日本の女子スポーツの歴史的ヒーローとして名高い人見絹枝である。人見は第2回世界女子オリンピック大会にも一人で出場し総合優勝しており、国民の期待を担っての出場であった。ところが100メートルで決勝進出できず、そのままでは日本の地を踏めないと、まだ一度も走ったことのなかった800メートルに出場し銀メダルを獲得した[3)]。日本人女子初出場、初メダリストとして歴史に残ることになるのである。

第10回ロサンゼルス大会で水泳（競泳、飛込み）にも参加し、第11回、第15回大会と、2競技参加時代が16年の空白時代を含んで四半世紀間続く。（第12回、13回大会はオリンピック中止。 第14回大会は日本不参加。） この頃の日本女子競技者参加人数は10人台であった。この間に人見と並ぶ歴史的ヒーローで日本女子初の金メダリスト前畑秀子が現れる。第10回大会で水泳女子200m平泳で銀メダルに終わった前畑は、再度第11回ベルリン大会に挑戦し金メダルを獲得した[4)]。

表1 オリンピック競技大会における日本女子競技者と本学競技者の参加競技拡大傾向

回	開催年	開催地（日本女子参加開始順）	陸上競技	水泳 競泳	水泳 飛込	水泳 シンクロ	体操 競技	体操 新体操	フェンシング	カヌー	馬術	バレーボール	アーチェリー	バスケットボール	ハンドボール	自転車	射撃	テニス	ヨット	卓球	漕艇	柔道	バドミントン	ホッケー	ゴルフ	フィギュアスケート	女子参加可能競技数	日本女子参加数	本学参加競技数
1	1896	アテネ（ギリシャ）	「	「			「		「							「	「	「							「○		0	0	0
2	1900	パリ（フランス）									「」		「	「			」	○	「」		「						2	0	0
3	1904	セントルイス（アメリカ）											○	」											○」		2	0	0
4	1908	ロンドン（イギリス）											○」				「	○	「					「」		「○」	3	0	0
5	1912	ストックホルム（スウェーデン）	『	○『	○					「	「							○『									2	0	0
7	1920	アントワープ（ベルギー）		○														○	」					「」		「○」	3	0	0
8	1924	パリ（フランス）		○					○								」	○」	□							以後冬季大会へ	4	0	0
9	1928	アムステルダム（オランダ）	◎	○			○		○										□		『			「			5	1	0
10	1932	ロサンゼルス（アメリカ）	◎	◎	◎		『		○								「		□『					『			4	2	0
11	1936	ベルリン（ドイツ）	◎	◎	◎		○		○					『	「				□								5	2	0
14	1948	ロンドン（イギリス）	○	○			○		○『	○	『				」				□								6	2	0
15	1952	ヘルシンキ（フィンランド）	◎	◎	◎		○		○	○	□					『	『		□								7	3	0
16	1956	メルボルン（オーストラリア）	◎	◎	◎		◉		○	○	□								□								7	3	1
17	1960	ローマ（イタリア）	◎	◎	◎		◎		○	○『	□	『							□								7	3	0
18	1964	東京（日本）	◎	◎	◎		◎		◎	◎	回	◎							□			『」					8	7	0
19	1968	メキシコシティー（メキシコ）	○	◎	◎		◎		○	○	□	◉	『						□								8	3	1
20	1972	ミュンヘン（西ドイツ）	◎	◎	◎		◎		○	○	回	◎	◎		『				□			「					9	6	0
21	1976	モントリオール（カナダ）	◎	◎	◎		◎		◎	○	□	◎	◎	◎	◎				□		○						12	8	0
22	1980	モスクワ（ソビエト）	○	○	○		○		○	○	□	○	○	○	○				□		○						12	0	0
23	1984	ロサンゼルス（アメリカ）	◉	◎	◎	◎	◎	◉	◉	○	□	◎	◎	○	○	◎	◎	『	□	『	○			○			15	8	3
24	1988	ソウル（韓国）	◎	◎	◎	◎	◎	◉	◉	◉	回	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	回	◎	○		『	○			17	13	3
25	1992	バルセロナ（スペイン）	◉	◎	◎	◎	◎	◉	◉	◉	□	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	回	◎	◎	◎	◎	○			19	15	4

注）・各種資料を基に作成した。
・記号の意味は以下の通りである。
○女子競技　◎日本女子競技者参加　◉本学競技者参加　□男女の区別のない競技　回男女区別ない競技に日本女子競技者参加
「男子競技の開始、再開　」男子競技中断　『日本男子競技者参加開始　『日本、男子競技と同時
日本男子競技者の中断は省略した。
中間に記した「『はその下の回に付随し、」』はその上の回に付随する。
・6回、12回、13回大会は中止である。14回、22回大会は日本選手団は参加しなかった。
・16回大会は馬術のみストックホルムで実施された。
・25回までで男子のみの競技は、本表には記載されていない水球、ボクシング、レスリング、ウエイトリフティング、近代五種競技、野球、サッカー（26回から女子も参加予定）である。

③　体操初参加から東京大会以前の3競技参加時代
（1956年第16回メルボルン大会ー1960年第17回ローマ大会）

体操における日本女子初の海外遠征は1954年のローマでの第13回世界選手権大会への参加であった。この大会の平均台で現在（1996年1月）までのオリンピック、世界選手権大会を通じて体操日本女子唯一の金メダリストが誕生していた。世界選手権4回、オリンピック3回連続出場をし、世界選手権で金1、銀1、銅5、オリンピックで銅1を獲得し体操界に君臨する事になる田中敬子（途中で結婚し池田となる）である[5)]。その2年後に体操は1956年第16回メルボルン大会にこの田中を含めて6人で初出場し、日本女子は3競技出場となった。

次回の1960年第17回ローマ大会までが陸上競技、水泳、体操の3競技時代である。この間、女子が参加できるのは7競技であったから、女子競技のフェンシングおよびカヌー、男女を区別しない馬術およびヨットに出場を果たしていなかった。

④　東京大会での７競技参加から途中の減少を経て８競技参加まで
（1964年第18回東京大会ー1984年第23回ロサンゼルス大会）

第18回東京大会で、バレーボールが男女同時にオリンピック競技となり女子競技6、男女区別なし2となった。我が国での開催なのでJOCは全競技に参加することにしたので（不参加種目はあり）、男子だけが参加した男女区別なしのヨットを除いて7競技に参加した。これまでの3競技に加えてバレーボール、フェンシング、カヌー、馬術に参加することができた。このうち、フェンシング、カヌーは女子競技になってから日本女子競技者が参加するまでに時間がかかった競技であり、東京大会以後も日本女子競技者の参加は途切れがちである。初競技となったバレーボールで、「東洋の魔女」と称された日本チームは前畑に次いで史上2個目の金メダルを獲得し、国民的ヒーローとなった。

次回の1968年第19回メキシコ大会は参加拡大に初めて逆行するものであった。7競技参加を果たした東京大会が例外であったみることもできる。人見以来の伝統を築いてきた陸上競技にも参加せず、水泳、体操、バレーボールのみとなった。東京大会とメンバーが全員入れ替わったバレーボールは銀メダルを獲得した。

1972年第20回ミュンヘン大会では陸上競技と馬術に再び参加し、長い間男女ともにオリンピック競技から消えていたアーチェリーが男女とも復活し、日本女子は初参加し前回の3競技を加えた計6競技の参加であった。女子競技の増加と共に日本女子の参加も増加し、1976年第21回モントリオール大会ではバスケットボール、ハンドボール、漕艇が加入した。日本女子は前回出場の馬術が消え、フェンシングに再び参加し、前回からの5競技を加えたこれまでで最も多い8競技に参加した。第22回モスクワ大会は日本不参加で、8年後の1984年第23回ロサンゼルス大会でも8競技の参加であった。2競技が入れ替わり、バスケットボール、ハンドボールに代わって、この回から新競技となった自転車、射撃と前回からの陸上競技、水泳、体操、フェンシング、バレーボール、アーチェリーに参加した。女子が出場可能な競技は15なので、日本女子競技者の参加競技は約半分である。

⑤　13競技、15競技参加時代
（1988年第24回ソウル大会ー1992年第25回バルセロナ大会

1988年第24回ソウル大会では長い間オリンピック競技から消えていたテニスと新しく卓球が加わり女子競技者は17競技に参加可能であった。日本女子競技者はバスケットボール、ハンドボール、漕艇、ホッケーを除いた13競技に参加した。前回の8競技としテニス、卓球に加えてヨットに初参加し、馬術、カヌーに再参加した。

1992年第25回バルセロナ大会ではさらにバドミントン、柔道が新競技となり、19競技に参加可能となった。日本女子競技者は前回の13競技から馬術が消え、バドミントン、柔道、漕艇に初参加した。

(2)冬季大会

冬季大会は夏季の1924年第8回大会の年に第1回が開かれた。表2に示したように、第1回の女子競技は

表2　冬季オリンピック競技大会における
日本女子競技者と本学競技者の参加競技拡大傾向

回	開催年開催地 ＼ 女子実施競技（日本女子参加開始順）	スケート フィギュア	スケート スピード	スキー	リュージュ	女子競技数	日本女子参加数	本学参加競技数
1	1924 シャモニー・モンブラン(フランス)	○ 「	「	「	「	1	0	0
2	1928 サン・モリッツ（スイス）	○ 『		『		1	0	0
3	1932 レークプラッシド(アメリカ)	○	『			1	0	0
4	1936 ガルミッシュ・パルテンキルヘン(ドイツ	◎		○		2	1	0
5	1948 サン・モリッツ（スイス）	○		○		2	0	0
6	1952 オスロ（ノルウェー）	○		○		2	0	0
7	1956 コルチナ・ダンペッツオ(イタリア)	○		○		2	0	0
8	1960 スコー・バレー（アメリカ）	◎	◎	○		2	1	0
9	1964 インスブルック（オーストリア）	◎	◎	○	○	3	1	0
10	1968 グルノーブル（フランス）	◎	◎	◎	○ 『	3	2	0
11	1972 札幌（日本）	◎	◉	◎	◎	3	3	1
12	1976 インスブルック（オーストリア）	◎	◎	◎	◎	3	3	0
13	1980 レークプラッシド(アメリカ)	◎	◎	○	○	3	1	0
14	1984 サラエボ（ユーゴスラビア）	◎	◎	○	◎	3	2	0
15	1988 カルガリー（カナダ）	◎	◎	○	◎	3	2	0
16	1992 アルベールビル(フランス)	◎	◎	◎	○	3	2	0
17	1994 リレハンメル（ノルウェー）	◎	◎	◎	○	3	2	0

注）・各種資料を基に作成した。
・記号の意味は表1と同様である。
・17回までで男子のみの競技は本表には記載されていないアイスホッケー、ボブスレー、バイアスロンである。

冬季大会となる以前から実施されていたスケート（フィギュア）のみであった。1936年第4回大会でスキーが、1960年第8回大会でスケート（スピード）が、1964年第9回大会でリュージュが加わり3競技である。アイスホッケー、ボブスレー、バイアスロンは女子競技となっていない。

日本女子の初参加は第4回大会のフィギュアスケートに唯一人で参加した、当時小学校六年生だった稲田悦子である。フィギュアスケートはその後3大会の不参加が続くが、第8回大会からは連続して参加している。スピードスケートは第8回大会で初参加して以来連続して参加している。スキーは第10回大会で初参加するが、第13回大会から第15回大会までは不参加である。リュージュは第11回大会から参加するが、第13回、第16回大会は不参加である。

(3)日本女子競技者の参加拡大傾向

日本女子競技者は、夏季大会においては第9回大会に女子初競技の陸上競技のみに初参加し、第10回大会で水泳にも初参加し2競技参加となった。第16回大会で体操に初参加し3競技参加となり、第18回大会で初競技のバレーボール、従来からの女子競技のフェンシング、カヌー、馬術にも初参加し7競技参加となる。ここまでに参加し始めた競技の内、陸上競技は1回欠場があるが、水泳、体操、バレーボールは日本選手団全体が不参加の回を除いて連続参加している。フェンシング、カヌー、馬術は断続的な参加である。第20回大会でアーチェリーに初参加し、以後連続参加する。第21回大会で女子初競技のバスケットボール、ハンドボールに初参加するが両方とも日本女子競技者はこの回のみの参加となる。男子は第1回大会から実施され、日本男子も第15回大会から参加していた自転車と射撃が第23回大会にようやく女子競技となり初参加し、第24回大会では再びオリンピック競技になったテニス、初競技の卓球、男女区別なしのヨットに初参加した。第25回大会では従来からの漕艇、女子初競技の柔道と男女とも初競技のバドミントンに初参加した。第23回大会以後参加し始めた競技はまだ期間が短いためもあろうがその後連続参加している。

日本の女子競技者は早く参加し始めた陸上競技、水泳、体操、バレーボールの伝統を保持しながら、参加競技を加えながら参加拡大してきた。当初は女子の参加可能な競技に対する日本の女子参加比率はゼロであったが、第9回大会で20%、以後増減しながら拡大し、第18回大会は例外として、最近の第24回、第25回大会では特に拡大し、第25回大会では78.9%に達した。まだ日本女子が1度も参加したことのない女子競技はホッケーのみである。未だに女子競技となっていないのは、水球、サッカー、ボクシング、レスリング、ウェイトリフティング、近代五種、野球である。このうちサッカーは本年の第26

回大会から実施される予定であり、日本女子競技者も出場権を得ている。

冬季大会においては第4回大会のフィギュアスケートに初参加した後、24年間の空白があり、第8回大会からはフィギュア、スピードスケート共に連続参加している。第10回大会にスキー、第11回大会にリュージュに初参加し全女子競技3競技に参加を果たすが、その後スキー、リュージュには不参加の大会もある。

2　本学競技者の参加拡大傾向

表1、表2に示したように本学競技者の参加は第二次世界大戦後のことであることが明かとなった。これは、前述したように本学は長い間、競技会参加を規制していたことの裏付けとなる。しかし、本学初のオリンピック競技大会参加はその考えを単に転換させたことではなかった。日本女子体操初参加の第16回メルボルン大会に代表6人中3人の競技者を送ることができ、新体操に全回参加することができたのもまた、1908（明治41）年から1955（昭和30）年まで、第4代目の設立者・校長を勤めた藤村トヨの功績である。トヨは競技スポーツは健康を害するから禁止していた。それはスポーツが悪いのではなく、身体がスポーツや程度に適していないことと記録や勝つために努力し過ぎる点にあるとしている。しかし、昭和3年のドイツ視察により、体操と水泳だけは無理をしない範囲で選手として出してもよいと感じ、体操競技を始めたのである。ドイツの徒手、器械体操は身体の自然に注意した無理のない自然的律動運動で、振動を利用して大きい運動も軽々とおこない、運動後の疲労も少ないことを知り、自分の理想の体操であると感じたのである。器械体操も要領さえ間違わなければ腹腰の運動であるから女子には有効と認めて平行棒と鞍馬を買って日本に送った。当初は自ら学んで日本に伝えようとしたが、優れた技術のドイツ人を日本に招く決意をし、昭和6年4月から7年12月までベルリンの体育大学女教師ワルターが本学や各地の講習会で指導したのであった[6)]。オリンピック初参加者たちはワルターによる指導ではなく、トヨや教え子による指導であり、メルボルン大会の日本選手団女子体操のコーチ兼監督はワルターに直接指導を受けた吉田夏であった。トヨはオリンピック視察をし人見の応援もしていたが、本学競技者の応援をすることはできなかった。本学初参加はトヨの死の翌年であった。本学でわが国における女子体操の基礎が作られたのである。 オリンピックで団体徒手体操が行われたのは、ヘルシンキとメルボルン大会のみで、団体徒手体操はその後、新体操へと発展していく。

本学のオリンピック参加競技は、夏季大会においては日本女子競技者が出場を果たした順の4位7競技（4位は同時に4競技）までにあり、東京オリンピックまでに参加を果たした競技のうち水泳と馬術を除いた競技であることが分かる。すなわち、陸上競技、体操[7)]、バレーボール、フェンシング、カヌーの5競技である。そのうち、フェンシングとカヌーは前述したように、日本女子競技者の初参加が遅く、東京オリンピック以後途切れがちであった。これは世界と日本の競技のレベルの違いがあることを示すものであろう。本学競技者はいわゆる、伝統的な3女子競技と日本ではそうではない2競技に参加してきたということになる。冬季大会においてはスケート（スピード）のみであるから合計6競技となる。

本学競技者の競技別初参加順位は1位が1956年第16回大会の体操、2位が1968年第19回大会のバレボール、3位が1972年冬季第11回大会スピードスケート、4位が1984年第23回大会の陸上競技、フェンシング、6位が1988年第24回大会のカヌーである。1980年第22回モスクワ大会にフェンシングが参加予定であったが、ソ連のアフガニスタン侵攻をオリンピックを利用して止めさせようとしたアメリカ合衆国に従う形で、日本選手団が不参加になったので出場する事ができなかった。

1956年、68年、72年と断続的に1競技づつの参加であったが、84年、88年、92年は3競技、3競技、4競技と連続して参加している。特に、体操の中の新種目となった新体操は全回に参加しており、フェンシング、カヌーも初参加後、連続参加である。

表3に本学オリンピック選手の大会別参加競技、

表3　本学オリンピック選手の大会別参加競技、種目と学生、卒業生別人数、競技別日本代表人数

回	年	開催地	競技・種目	氏名	学生	卒業生	計	日本人数
夏16	1956	ﾒﾙﾎﾞﾙﾝ	体操・団体総合、個人総合	池田弘子		卒		
			徒手（団体,個人）、平均台、	久保田恭子		卒		
			平行棒、鞍馬（各々参加）	坂下千寿子		卒	3	6
夏19	1968	ﾒｷｼｺｼﾃｨｰ	ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	井上節子		卒		
				福中佐知子		卒	2	12
冬11	1972	札幌	ｽｹｰﾄ・ｽﾋﾟｰﾄﾞ500m、1000m	小野沢良子		卒	1	6
夏23	1984	ﾛｻﾝｾﾞﾙｽ	陸上競技・やり投げ	森美乃里		卒	1	6
			体操・新体操	山崎浩子		卒		
				秋山エリカ	学		2	新体2
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ個人、団体	宮原美江子		卒	1	4
夏24	1988	ｿｳﾙ	体操・新体操	秋山エリカ		卒		
				大塚裕子	学		2	新体2
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ個人、団体	宮原美江子		卒	1	5
			ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸﾍﾟｱ500m	小林美幸	学			
				中里晴美		卒	2	2
夏25	1992	ﾊﾞﾙｾﾛﾅ	陸上競技・10ｷﾛ競歩	佐藤優子		卒	1	9
			体操・新体操	川本ゆかり	学		1	新体2
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ個人	高柳裕子		卒	1	1
			ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸﾍﾟｱ500m	小林美幸		卒	1	3
合計	延べ人数				4	15	19	
	実人数						16	

秋山（学一卒）、宮原（卒一卒）、小林（学一卒）が2回参加

注）　1980年第22回モスクワ大会フェンシング選手に横井晶子（卒）が選ばれていたが、日本選手団は参加しなかったため「幻のオリンピック選手」となった。

種目と学生、卒業生別、人数、日本人数を示した。学生延べ4人、卒業生延べ15人の計19人、その内、新体操の秋山、フェンシングの宮原、カヌーの小林の3名が2回出場しているので実人数16人がオリンピック選手の栄光に輝いている。そのほかに1名が「幻のオリンピック選手」である。

Ⅱ　アジア競技大会における女子競技および本学競技者の参加拡大傾向

1　女子競技の拡大傾向

アジア競技大会は、戦前にアジアで行われていた極東選手権競技大会と西アジア競技大会を統合する形で、戦後になって始まった。第1回大会の1951年はわが国が戦後再びオリンピックに参加し始めた年の一年前である。アジア競技大会の女子競技には表4に示したように、男女を区別しない競技を除いて日本女子競技者は全て参加しているから、女子競技の中での日本女子の参加について考察する必要はない。ここでは女子競技の拡大傾向についてオリンピック競技と比較しながら考察する。

表4はアジア競技大会に女子競技となった順に並べてある。回数を重ねる毎に競技数が増え、特に1990年第11回北京大会からの拡大が著しい。オリンピック競技大会と比較すると、陸上競技、水泳の順で拡大した点は同様であるが、次には球技が加わり、体操、フェンシング、カヌー、アーチェリーの加入は遅い。テニス、ハンドボール以外の球技はオリンピックより早く採用されている。アジア競技大会の方が競技数が多い。かつては男性的とみられたサッカー、ウエイトリフティングやアジア特有の競技である武術大極拳、ソフトテニス、空手道などおよびボウリング、ゴルフ、ソフトボールはアジア競技大会では実施されているが、まだオリンピック競技大会では実施されていない。ボウリング以外は、1990

表4　アジア競技大会における女子競技者と本学競技者の参加競技拡大傾向

回	開催年	開催地	陸上競技	水泳競泳	水泳飛込	テニス	卓球	バレーボール	バドミントン	体操競技	体操新体操	バスケットボール	フェンシング	アーチェリー	ボウリング	ホッケー	射撃	自転車競技	漕艇	馬術	ヨット	サッカー	カヌー	ウエイトリフティング	ハンドボール	ソフトボール	ゴルフ	柔道	武術太極拳	ソフトテニス	空手道	日本参加競技数	本学参加競技数
1	1951	ニューデリー（インド）	◎	「『	「『							◎						◎」				◎		◎								1	0
2	1954	マニラ（フィリピン）	◎	◎	◎	◎	◎										□															2	0
3	1958	東京（日本）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎								□															4	0
4	1962	ジャカルタ（インドネシア）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎								□															6	0
5	1966	バンコク（タイ）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎								□															6	0
6	1970	バンコク（タイ）	◎	◎	◎			◎	◎	◎			◎				□				□											4	0
7	1974	テヘラン（イラン）	◎	◎	◎	◎	◎	◉	◎	◎		◎	◎」	◎	◎		□															9	1
8	1978	バンコク（タイ）	◉	◎	◎	◉	◎	◎	◎	◎		◎	◉	◎	◎」		回				□											12	3
9	1982	ニューデリー（インド）	◉	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	□		◎	□	□				◎		◎					10	1
10	1986	ソウル（韓国）	◉	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◉	◎	◎」	◎	◎	◎	◎	回	□		◎					◎	◎			15	2
11	1990	北京（中国）	◉	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◉	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◉	◉	◉	◉	◎	◎	◎			23	6
12	1994	広島（日本）	◉	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◉	◎	◉	◎	◎	◎	◎	◎	◎	回	◎	◎	◉	◉	◉	◉	◎	◎	◎	◎	◎	27	7

注）・各種資料を基に作成した。
・記号の意味は表1と同様である
・12回までで男子のみの競技は、表にはない水球、ボクシング、レスリング、テコンドー、ガバディー、セパタクロー、野球、近代五種である。

年第11回北京大会以後の新競技である。サッカー、ソフトボールはオリンピックにおいても本年（1996年）の第26回アトランタ大会から実施される。当初はヨーロッパ中心であったオリンピックはヨーロッパで盛んであった競技から拡大し、アジアだけのアジア競技大会は団体球技やアジア特有の競技が拡大するという異なる傾向を持っていると言えよう。

表5に示したように冬季大会の歴史は浅く、1986年に第1回が札幌で行われ、女子競技はスキー、スケート（スピード、ショートトラック、フィギュア）であった。1990年の第2回札幌大会ではフィギュアスケートが実施されなかった。本年（1996）2月に中国のハルビンで実施予定の第3回ではアイスホッケーが競技に加わる予定である。

表5　冬季アジア競技大会における女子競技者と本学競技者の参加競技拡大傾向

回	開催年	開催地	スキー	スケート スピード	スケート ショートトラック	スケート フィギュア	日本参加競技数	本学参加競技数
1	1986	札幌（日本）	◎	◎	◎	◎	2	0
2	1990	札幌（日本）	◎	◎	◎		2	0

注）・各種資料を基に作成した。
・記号の意味は表1と同様である
・男子のみの競技を除いて、男子と女子の競技の実施年は同じであるから「を省略した。
・男子のみの競技は、表にはないバイアスロン、アイスホッケー（3回から女子も実施予定）である。

2　本学競技者の参加拡大傾向

表4に示したように本学競技者のアジア競技大会参加は遅く、初参加は1974年第7回テヘラン大会のバレーボールであり、その後毎回何れかの競技が参加している。参加したことのある競技は、バレーボール、陸上競技、テニス、フェンシング、ウエイトリフティング、ハンドボール、カヌー、体操（新体操）、ソフトボールの9競技である。この9競技のう

表6　本学アジア競技大会選手の大会別参加競技、種目と学生、卒業生別人数

回	年	開催地	競技・種目	氏名	学生	卒業生	計
7	1974	ﾃﾍﾗﾝ	ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	斎藤春枝		卒	1
8	1978	ﾊﾞﾝｺｸ	陸上競技・やり投げ	渋沢奈保美	学		
			やり投げ	森美乃里	学		
			200m、400mﾘﾚｰ	櫛渕淳子	学		
			100mﾊｰﾄﾞﾙ	茂木多美江		卒	4
			ﾃﾆｽ・ｼﾝｸﾞﾙｽ、ﾀﾞﾌﾞﾙｽ	米沢そのえ		卒	1
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ団体	弥富徳子	学		1
9	1982	ﾆｭｰﾃﾞﾘｰ	陸上競技・やり投げ	森美乃里		卒	1
10	1986	ｿｳﾙ	陸上競技・10ｷﾛ競歩	平山秀子	学		
			(出場せず)	小野富美子	学		2
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ個人、団体	宮原美江子		卒	
			ﾌﾙｰﾚ個人、団体	中山清美		卒	
			ﾌﾙｰﾚ団体	金澤真利子		卒	
			ﾌﾙｰﾚ団体	高柳裕子	学		4
11	1990	北京	陸上競技・400m、1600mﾘﾚｰ	小野富美子		卒	
			陸上競技・10ｷﾛ競歩	増田房子		卒	2
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ個人、団体	宮原美江子		卒	
			ﾌﾙｰﾚ団体	高柳裕子		卒	2
			ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｨﾝｸﾞ67.5ｷﾛ級	長谷場久美		卒	1
			ﾊﾝﾄﾞﾎﾞｰﾙ	村山みどり	学		1
			ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸｼﾝｸﾞﾙ500m、ﾍﾟｱ500m、ﾌｫｰ500m	小林美幸		卒	
			ｶﾔｯｸﾍﾟｱ500m、ﾌｫｰ500m	新井久美	学		
			ｶﾔｯｸﾌｫｰ500m	望月奈津美	学		3
			ｿﾌﾄﾎﾞｰﾙ	組島千登美		卒	1
12	1994	広島	陸上競技・砲丸投げ	篠崎浩子	学		
			10ｷﾛ競歩	佐藤優子		卒	2
			体操・新体操	川本ゆかり	学		1
			ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ個人、団体	高柳裕子		卒	1
			ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｨﾝｸﾞ・76ｷﾛ級	長谷場久美		卒	1
			ﾊﾝﾄﾞﾎﾞｰﾙ	村山みどり		卒	1
			ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸﾍﾟｱ500m	小林美幸		卒	
			(出場せず)	由谷恵	学		2
			ｿﾌﾄﾎﾞｰﾙ	大島慈子	学		1
合計	延べ人数				14	19	33
	実人数						25

高柳（学―卒―卒）が3回、
森（学―卒）、小野（学―卒）、宮原（卒―卒）、村山（学―卒）、
小林（卒―卒）、長谷場（卒―卒）が2回参加

ち、オリンピック競技大会にはテニス、ハンドボールは本学からまだ参加しておらず、ウエイトリフティング、ソフトボールは競技そのものがまだオリンピック競技大会では実施されていない。第10回大会までは1から3競技への参加であったが、1990年第11回北京大会では6競技、1994年第12回広島大会では7競技に参加した。

陸上競技が1978年第8回バンコク大会以後連続5回、フェンシングも1978年第8回バンコク大会以後連続4回の参加で、バレーボール、テニスは1回のみ、カヌー、ウエイトリフティング、ハンドボール、ソフトボールは新競技になってから2回連続参加し、新体操はまだ1回のみの実施である。

本学競技者はまだ冬季大会へは参加していない。本年（1996年）2月開催予定の第3回ハルビン大会で新競技となるアイスホッケーに1名、従来からの競技のショートトラックスピードスケートに1名参加予定である[8)]。

参加競技、種目と学生、卒業生別、人数は表6の通りである。学生延べ14人、卒業生延べ19人の計33人、そのうち、フェンシングの高柳が3回、陸上競技の森、小野、フェンシングの宮原、ハンドボールの村山、カヌーの小林、ウエイトリフティングの長谷場の6名が2回出場しているので実人数25人がアジア競技大会選手の栄光に輝いている。オリンピック競技大会と比較すると現役大学生の出場比率が高い。陸上競技の森、佐藤、新体操の川本、フェンシングの宮原、高柳、カヌーの小林はオリンピック競技大会とアジア大会の両方に出場している。

Ⅲ　ユニバーシアード大会における日本女子競技者および本学競技者の参加拡大傾向

1　日本女子競技者の参加拡大傾向

表7に示したように、ユニバーシアード大会で実施したことのある女子競技数は13と少なく、実施回数の多い伝統のある競技は7競技のみである。1983年以降拡大した6競技中、自転車競技、カヌー、ホッケー、サッカー、柔道は1回のみの実施、漕艇は3回のみの実施である。サッカーと柔道は男子の実施開始年から大きく遅れて女子競技となった。

日本女子競技者はオリンピック競技大会やアジア競技大会と同様、1959年に陸上競技から参加し始めた。次いで1961年にフェンシング、1965年にバレーボール、体操、1967年に水泳、テニス、バスケットボールが加わった。他の大会と比べ、フェンシングの参加が早く、水泳の参加が遅い。1983年以後拡大した競技には全て参加している。これまで日本女子が参加したことのない競技はない。

表8はユニバーシアード冬季大会の参加拡大傾向を示したものである。フィギュアスケートには女子競技開始と共に参加し始めたが、スキーは遅れた上に飛び飛びの参加であり、ショートトラックスピードスケートにはソフィア大会以後連続参加していることがわかる。

2　本学競技者の参加拡大傾向

表7に示したように、本学競技者はユニバーシアード女子競技の伝統的7競技のうち5競技（陸上競技、フェンシング、バレーボール、体操、水泳）とカヌー、サッカーおよび冬季のスケート（ショートトラック）の8競技に参加している。1965年のブタペスト大会に初参加して以来、1977年のソフィア大会を除いて各大会に1から4競技に参加者を出している。参加開始年は順に、1965年バレーボール、1970年陸上競技、体操、1979年フェンシング、1985年水泳、1987年カヌー、1993年スケート、サッカーである。水泳、サッカーの参加者は三大会ではユニバーシアード大会のみ、他の競技はオリンピック競技大会も、アジア競技大会にも参加者を出している競技である。バレーボールに7回、体操（競技）に5回と多く参加していることがわかる。高卒の実業団選手の活躍が多いバレーボール、ジュニアの選手の活躍が目立つ体操競技の中で、大学のレベルでは上位であることを示すものであろう。

参加競技、種目と学生、卒業生別、人数は表9の通りである。学生延べ28人、卒業生延べ19人の計47人、そのうち、バレーボールの井上、福中、斎藤、今野、フェンシングの宮原、中山、スケートの田中の7名が2回参加しているので実人数、40名がユニバーシアード参加選手である。

Ⅳ　巡回および複数回参加者について

これまで述べてきた三大会の参加人数をまとめると、表10のようになる。オリンピック競技大会19人、アジア競技大会33人、ユニバーシアード大会47人の計99人、実参加人数81人、各大会の重複参加者を整理すると競技者実人数は63人である。実人数を明らかにするため、表11の下に三大会、二大会、一大会二回、一回参加者別に整理した。三大会を比較すると、オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会の順に参加者が増えていく。学生、卒業生別にみると、この順に学生の比率が高くなる。オリンピックに参加することが最も難しく、卒業後

表7　ユニバーシアード大会における日本女子競技者と本学競技者の参加競技拡大傾向

開催年	開催地 ＼ 女子実施競技（日本女子参加開始順）	陸上競技	フェンシング	バレーボール	体操 競技	体操 新体操	水泳 競泳	水泳 飛込	テニス	バスケットボール	自転車競技	カヌー	漕艇	ホッケー	サッカー	柔道	女子競技数	日本参加競技数	本学参加競技数
1959	トリノ（イタリア）	◎	○	「『	「『		○	「『	○	「『							4	1	0
1961	ソフィア（ブルガリア）	◎	◎	○	○		○	○	○	○							7	2	0
1963	ポルトアングレ（ブラジル）	◎	○	○『	○		○	○	○								6	1	0
1965	ブダペスト（ハンガリー）	◎	◎	◉	◎		○	○	○	○							7	4	1
1967	東京（日本）	◎	◎	◉	◎		◎	◎	◎	◎						「」	7	7	1
1970	トリノ（イタリア）	◉	○	◉	◉		○	◎	◎	○							7	5	3
1973	モスクワ（ソビエト）	◎	○	◉	◎		◎	○	◎	○							7	5	1
1977	ソフィア（ブルガリア）	○	○	◎	◎		○	◎	◎	◎							7	5	0
1979	メキシコシティー（メキシコ）	○	◉	◎	◉		○	◎	◎	○					「」		7	5	2
1981	ブカレスト（ルーマニア）	○	◉	◉	◉		○	○	◎	○							7	4	3
1983	エドモントン（カナダ）	◎	◉	◎	◎		◎	◎	◎	◎	「◎」						8	8	1
1985	神戸（日本）	◉	◉	◎	◎		◉	◎	◎	◎		「◉」	「◎		「」	「」	7	7	3
1987	ザグレブ（ユーゴスラビア）	◎	◎	◎	◉		◎	○	◎	◎			◎」				9	9	2
1989	デュースブルグ（西ドイツ）	◎	◉										◎」	「◎」	「		3	3	1
1991	シェフィールド（イギリス）	◎	◎	◎	◎	◉	◎	◎	◎	◎			「◎」		◉		8	8	1
1993	バッファロー（アメリカ）	◎	◉	◉	◎		◎	◎	◎	◎						「◎	9	9	3
1995	福岡（日本）	◉	◉	◉	◉	◉	◎	◎	◎	◎							8	8	4

注）・各種資料を基に作成した。
・記号の意味は表1と同様である
・男子のみの競技は表にはない、水球、野球である。

表8　ユニバーシアード冬季大会における日本女子競技者と本学競技者の参加競技拡大傾向

開催年	開催地	スケート フィギュア	スキー	スケート ショートトラック	スケート スピード	バイアスロン	女子競技数	日本参加競技数	本学参加競技数
1960	シャモニー（フランス）	「◎」	○				1	0	0
1962	ビラール（スイス）	◎	○				2	1	0
1964	スピンドルムリン（チェコ）	◎	○				2	1	0
1966	トリノ他（イタリア）	◎	○				2	1	0
1968	インスブルック（オーストリア）	◎	◎		「◎」		2	2	0
1970	ロバニエミ（フィンランド）	◎	○				2	1	0
1972	レークプラシッド（アメリカ）	◎	○		「」		2	1	0
1981	ハカ（スペイン）	◎	○				2	1	0
1983	ソフィア（ブルガリア）	◎	◎	「◎」			2	2	0
1985	ベルノ（イタリア）	◎	◎	○	「◎」		2	2	0
1987	ストラプスケプレソ（チェコ）	◎	◎	「◎」			2	2	0
1989	ソフィア（ブルガリア）	◎	○	◎	「◎」		2	1	0
1991	札幌（日本）	◎	◎	◎	◎	「○」	2	2	0
1993	ザコパネ（ポーランド）	◎	◎	◉			3	2	1
1995	ハカ（スペイン）	◎	◎	◉			2	2	1

注）・各種資料を基に作成した。
・記号の意味は表1と同様である
・男子のみの競技は表にはないアイスホッケーである。

表9　本学ユニバーシアード大会選手の大会別参加競技、種目と学生、卒業生別

年	開催地	競技・種目	氏名	学生	卒業生	計
1965 夏	ブダペスト	バレーボール	井上節子	学		
			福中佐知子	学		2
1967 夏	東京	バレーボール	井上節子		卒	
			福中佐知子		卒	
			斎藤春枝	学		3
1970 夏	トリノ	陸上競技・やり投げ	清野京子		卒	1
		バレーボール	斎藤春枝	学		
			大渕優子	学		2
		体操・団体、個人総合	鈴木和代		卒	1
1973 夏	モスクワ	バレーボール	橋本純子	学		
			助川よし子	学		2
1979 夏	メキシコシティー	体操・団体、個人、跳馬 平均台、段違い平行棒 ゆか	樋田邦子	学		1
		フェンシング・フルーレ団体、個人	藤巻恵子		卒	
		フルーレ団体	角谷圭子		卒	
		フルーレ団体、個人	弥富徳子	学		3
1981 夏	ブカレスト	体操　（出場せず）	鬼丸律子	学		1
		フェンシング・フルーレ団体	大貫尚子		卒	1
		バレーボール	千坂由紀乃	学		1
1983 夏	エドモントン	フェンシング・フルーレ団体、個人	宮原美江子		卒	
		（出場せず）	中山清美	学		2
1985 夏	神戸	陸上競技・1600mリレー、200m、400m	小野富美子	学		
		400mハードル	山本玲子	学		
		1500m	田島由紀子	学		
		やり投げ	山本久美	学		4
		水泳・100m自由形、200m自由形、400mリレー、800mリレー	高橋眞紀子		卒	
		400m自由形、800m自由形、800mリレー	松木芙美子	学		2
		フェンシング・フルーレ個人、団体	中山清美		卒	
		フルーレ団体	宮原美江子		卒	
		フルーレ団体	金澤真理子		卒	3
1987 夏	ザクレブ	体操・団体、個人	澤井美穂	学		1
		カヌー・カヤックシングル500m	小林美幸		卒	1
1989 夏	デュースブルグ	フェンシング・フルーレ個人、団体	高柳裕子		卒	1
1991 夏	シェフィールド	体操・新体操	川本ゆかり	学		
			藤野朱美	学		2
1993 冬	ザコパネ	スケート・ショートトラック、500m、1000m、1500m、3000m、3000mリレー	田中千景	学		1
1993 夏	バッファロー	フェンシング・フルーレ個人、団体	柳澤純子		卒	1
		バレーボール	今野裕美子	学		1
		サッカー	佐藤恵子		卒	1
1995 冬	ハカ	スケート・ショートトラック、1500m、3000m、3000mリレー	田中千景	学		
		500m、1000m、1500m 、3000mリレー	小原貴枝	学		2
1995 夏	福岡	陸上競技・800m、1600mリレー	玉手由子	学		
		マラソン	草萱昌子		卒	
		砲丸投げ	篠崎浩子		卒	3
		バレーボール	今野裕美子	学		1
		体操・団体総合	岡真紀子	学		1
		・新体操	山尾朱子	学		1
		フェンシング・エペ個人	久保紀子		卒	1
合計	延べ人数			28	19	47
	実人数					40

井上（学―卒）、福中（学―卒）、斎藤（学―学）、宮原（卒―卒）、中山（学―卒）、田中（学―学）、今野（学―学）が2回参加

も競技生活を続けることにより達成できるのであり、学生時代に参加する事ができたのは僅か4人である。

古代ギリシャにおいては、オリンピア祭等四大競技祭を巡回して優勝した者は巡回優勝者として、讃えられた。それにならい三大会の巡回、あるいは二大会の複数回参加者を選んだのが表11である。4年に1回のオリンピック競技大会とその中間年に4年に1回のアジア競技大会（1994年からは冬季オリンピックの年にアジア競技大会）、2年に1回のしかも卒業後の時間的制限のあるユニバーシアード大会に巡回して参加することは難しい。実力を維持し続けなければならないし、競技が大会で採用されているという運もある。最短では3年で成し遂げられる。

表11は巡回および複数回参加者について、参加の困難度からオリンピック参加を3点、アジア大会参加を2点、ユニバシアード大会参加を1点とし合計得点が高い順に並べた。いわば、実力と運を兼ね備えた「本学名選手番付け」ということになろう。厳密には、競技人口、日本人が標準記録を突破する難易度や予選会通過の難易度、選手派遣に際しての諸問題等を考慮せねば公平ではないが、単に参加した事実だけで並べた。それぞれの参加回数、参加年、合計回数、最初の参加から今のところ最後の参加までの期間を示した。

三大会巡回参加は4名が成し遂げており、4名共最初の巡回を4年で完成している。そのうち3名は番付けの三位までに入っている。

第一位はフェンシングの宮原美江子である。各大会2回計6回、二巡回を卒業後2年目からの8年間で成し遂げたのである。初参加の1983年のユニバーシアード大会に本学研究生として参加し、その後の所属を変えながら参加し続け[9]、可能な全大会に参加した。

第二位はカヌーの小林美幸である。1987年のユニバーシアード大会に大学2年生で参加した。この大会はこれまで唯一のカヌーが実施されたユニバーシアード大会であるから運に恵まれている。8年間でオリンピック競技大会にもアジア競技大会にも2度参加し宮原同様、所属を変えながら可能な大会には完全に参加した。

第三位はフェンシングの高柳裕子である。1986年のアジア競技大会に大学3年生で参加後オリンピック競技大会1回、アジア競技大会3回の参加を9年間で所属を変えながら成し遂げた。一大会三回の参加は高柳のみである。

4人目の巡回参加者は第五位の川本ゆかりである。川本は運に恵まれ、大学1年生で1991年ユニバーシアード大会で初めて実施された新体操に参加し、2年生でオリンピック競技大会に参加し、4年生でのアジア競技大会も初の新体操実施であった。学生時代の4年間で巡回参加を完成し引退した。

二大会参加者は10名である。陸上競技の森は7年間でオリンピック競技大会1回、アジア大会2回の計3回、小野は6年間でアジア競技大会2回、ユニバーシアード1回の計3回、佐藤は3年間でオリンピック競技大会とアジア競技大会に計2回、篠崎は2年間でアジア競技大会とユニバーシアード大会に計2回参加した。バレーボールでは井上、福中は2大会3回の参加を短大1年生から卒業後の実業団時代にかけての4年間で、斎藤は大学1年生、4年生で2回のユニバーシアード大会に参加した後、さらに実業団時代に

表１０　本学競技者オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会参加人数

		ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ	ｱｼﾞｱ大会	ﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ	計
延べ参加人数	学生	4	15	28	47
	卒業生	15	18	19	52
	計	19	33	47	99
実参加人数		16	25	40	81
2回参加人数		3	6	7	16
3回参加人数		0	1	0	1

参加競技者実人数　63人

表１１　巡回および複数回参加者　（「本学名選手番付け」）

競技	名前	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ 回数	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ 参加年	ｱｼﾞｱ大会 回数	ｱｼﾞｱ大会 参加年	ﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ 回数	ﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ 参加年	合計 回数	合計 期間	合計 点
ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ	宮原美江子	2	84,88	2	86,90	2	*83, 85	6	8年	12
ｶﾇｰ	小林美幸	2	・88,92	2	90 94	1	・*87	5	8	11
ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ	高柳裕子	1	92	3	・*86,90,94	1	89	5	9	10
陸上競技	森美乃里	1	84	2	・*78,82	0		3	7	7
体・新体操	秋山エリカ	2	・*84,88	当時競技なし		当時競技なし		2	5	6
体・新体操	川本ゆかり	1	・92	1	・94	1	・*91	3	4	6
陸上競技	小野富美子	0		2	・86 90	1	・*85	3	6	5
ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	井上節子	1	68	0		2	・*65, 67	3	4	5
ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	福中佐知子	1	68	0		2	・*65, 67	3	4	5
陸上競技	佐藤優子	1	*92	1	94	0		2	3	5
ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ	中山清美	0		1	86	2	・*83, 85	3	4	4
ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	斎藤春枝	0		1	74	2	・*67, ・70	3	8	4
ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｨﾝｸﾞ	長谷場久美	競技なし		2	*90,94	競技なし		2	5	4
ﾊﾝﾄﾞﾎﾞｰﾙ	村山みどり	日本参加なし		2	・*90,94	競技なし		2	5	4
陸上競技	篠崎浩子	0		1	・*94	1	95	2	2	3
ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ	弥富徳子	0		1	・*78	1	・79	2	2	3
ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ	金澤真利子	0		1	86	1	*85	2	2	3
ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	今野裕美子	0		0		2	・*93, ・95	2	3	2
ｽｹｰﾄ・ｼｮｰﾄﾄﾗｯｸ	田中千景	0		0		2	・*93, ・95	2	3	2

注）　・は学生時代の参加を示す。　*は各選手の最初の参加年を示す。
ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ参加を3点、ｱｼﾞｱ大会参加を2点、ﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ参加を1点とし点数順に並べた。

三大会参加者		4名	宮原、小林、川本、高柳
二大会参加者	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸとｱｼﾞｱ大会	2名	森、　佐藤（優）、
	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸとﾕﾆﾊﾞｼｱｰﾄﾞ	2名	井上、福中
	ｱｼﾞｱ大会とﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ	6名	斎藤、弥富、小野、篠崎、金澤、中山
		（計　10名）	
一大会のみ二回参加者	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ	1名	秋山
	ｱｼﾞｱ大会	2名	村山、長谷場
	ﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ	2名	今野、田中
		（計　5名）	
一大会一回のみ参加者	ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ	7名	池田、久保田、坂下、小野沢、山崎、大塚、中里
	ｱｼﾞｱ大会	11名	渋沢、櫛渕、茂木、米沢、平山、増田、新井、望月、組島、油谷、大島
	ﾕﾆﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ	26名	清野、大渕、鈴木、橋本、助川、樋田、藤巻、角谷、鬼丸、大貫、千坂、山本（玲）、田島、山本（久）、高橋、松木、澤井、藤野、柳澤、佐藤（恵）、小原、玉手、草萱、岡、山尾、久保
		（計　44名）	
競技者実人数		63名	（三大会4、二大会10、一大会のみ二回5、一回44）
大会別集計実人数		81名	
参加延べ人数		99名	

アジア競技大会に出場し8年間にわたっている。フェンシングの中山、弥富、金沢はアジア競技大会とユニバーシアード大会への参加である。

一大会で二回参加者は5名である。巡回を完成した川本の前を歩いていた秋山エリカは一大会ではあるがオリンピック競技大会2回で第五位にランクされる。1984年に初めてオリンピック競技大会で実施された新体操に大学2年生で参加し、オリンピックには2回参加するが、ユニバーシアード大会とアジア競技大会ではまだ新体操は実施されていなかった。ウエイトリフティングはアジア競技大会のみの実施である。学生時代は陸上競技・砲丸投げの選手であった長谷場は卒業後教員をしながら、24歳でウエイトリフティングを始めた[10]、わが国の女子ウエイトリフティングのパイオニアである。ハンドボールはオリンピック競技ではあるが日本の参加はモントリオール大会のみであり、ユニバーシアード競技にはなっていない。村山は大学4年生でアジア大会初競技となったハンドボールに参加し、4年後実業団選手として再度参加した。ユニバーシアード大会のみに大学時代に2回参加したのがバレーボールの今野とスケートの田中である。

まとめ

本研究の目的は、総合国際競技大会であるオリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会の日本女子競技者の参加の途が拡大した過程を明らかにしたうえで、本学競技者の参加拡大の傾向を明らかにすることであった。

オリンピック競技大会には、日本女子競技者は第9回大会陸上競技に初参加し、第10回に水泳、第16回に体操が加わる。第18回東京オリンピックでバレーボール等7競技に参加し、ここまでに参加を果たした競技の伝統を保持しながら参加拡大してきた。女子競技数は第23回大会以後特に増加し、日本女子の参加も拡大し、第25回大会には女子が参加可能な19競技中15競技に参加した。本学競技者の参加競技は夏季競技では東京オリンピックまでに日本が参加を果たしていた競技の範囲にあり、冬季大会はスケートのみである。第16回体操、第19回バレーボール、冬季第11回スピードスケート、第23回陸上競技、フェンシング、第23回カヌーの順に初参加を果たしてきた。特に1984年の第23回大会以後は毎回3から4競技に参加している。これまでに延べ19人実人数16人のオリンピック選手を出している。

アジア競技大会には日本女子競技者は女子競技全てに参加している。本学競技者のアジア大会参加は1974年のバレーボールからであり、その後、全大会にいずれかの競技が参加している。特に1990年北京大会には6競技、1994年広島大会には7競技に参加した。延べ33人実人数25人がアジア競技大会に出場した。

ユニバーシアード大会に日本女子競技者は1959年に陸上競技から参加し始め1961年にフェンシング、1965年にバレーボール、体操、1967年に水泳、テニス、バスケットボールの順に参加し始めた。1983年以降加わった開催地の特色により実施された6競技には全て参加している。本学競技者はバレーボール、陸上競技、体操、フェンシング、水泳およびカヌー、サッカー、冬季のショートトラックスピードスケートに参加している。1965年のバレーボールの参加が最も早い。延べ47人、実人数40人が参加した。

本学競技者は1956年から総合国際競技大会に参加し始めた。初参加順にみると本学の伝統的な体操（1956年）、バレーボール（1965年）から女子競技の拡大、日本女子競技者の参加拡大の流れのなかで、陸上競技（1970年）、スケート（1972年）、テニス、フェンシング（1978年）、水泳（1985年）、カヌー（1987年）、ウエイトリフティング、ハンドボール、ソフトボール（1990年）、サッカー（1993年）の12競技に参加拡大してきた。当初の各大会の参加競技数は少ないが、1984年以降数を増やした。このころから本学競技者は日本女子競技者の参加拡大傾向に追随し、多様な競技で国際的活躍を強めたとみなすことができよう。

本研究の所期の目的は達成することができた。今後は女子スポーツ発展のために、本学競技者のあるべき姿を探っていきたい。

注）

1)　実際には調査の結果、前身の私立東京女子体操学校、私立東京女子体操音楽学校、東京女子体専門学校の卒業生には総合国際競技会に選手として参加した者はなかった。

2)　本学入学以前の参加者は、1966年第5回アジア大会バンコク大会水泳200m個人ﾒﾄﾞﾚｰの木村遊子（日本大学第二高）や1978年第8回アジア大会バンコク大会陸上競技400m、1600mﾘﾚｰの久保田真由美（宮崎県立都城西高）などである。

3)　人見絹枝、スパイクの跡、平凡社、1929年、p.256-57.

4)　兵頭秀子、勇気、涙、そして愛　前畑は二度がんばりました、ごま書房、1990年、p.86.

5)　文藝春秋編、昭和スポーツ列伝、文藝春秋、1992年.p.90-92.

6)　掛水通子、「日本の女性スポーツと藤村トヨ」、スポーツ史講義、大修館書店、1995年. p.218-19.

7)　1984年第23回大会から新種目として採用された新体操は競技としては、体操に含まれるので、競技数には数えない。水泳も同様に競泳、飛込、シンクロで1競技である。

8)　アイスホッケーには短大保健体育学科2年の大野ゆかり（国土レディース所属）、ショートトラックスピードスケートには1993年、1995年のユニバーシアードにも参加した田中千景が参加予定である。

9)　所属や成績については「本学競技者に関する研究（2）ー主要国際競技大会出場者とその成績（1954-95年）についてー」で報告する。

10)　佐藤次郎、「はるかな夢、歴史を切り開く旅長谷場久美」、ＳＰＯＲＴＳもうひとつの風景、東京新聞出版局、1995年、p.156-58.

文献

1.　ブルガリア新体操協会／日本体操協会新体操委員会編著、ＬＡＵＲＥＬＳ　ＯＦ　ＢＥＡＵＴＹ（ﾛｰﾚﾙｽﾞ　ｵｳﾞ　ﾋﾞｭｰﾃｨ）ー写真でみる新体操の歴史、中教出版、1989年.

2.　文藝春秋編、昭和スポーツ列伝、文藝春秋、1992年.Pp.461.

3.　第12回アジア競技大会広島1994公式写真集、ぴあ、1994年.

4.　ＩＭＳ／ＳＴＵＤＩＯ　6、ベースボール・マガジン社編、第24回オリンピック競技大会・ソウル1988、国際オリンピック委員会、ソウルオリンピック組織委員会オフィシャルブック、1988年. Pp.235.

5.　ＩＭＳ／ＳＴＵＤＩＯ　6、ベースボール・マガジン社編、第25回オリンピック競技大会バルセロナ1992　日本オリンピック委員会＜ＪＯＣ＞公認記録写真集、1992年. Pp.235.

6.　岸野雄三他編、新版近代体育スポーツ年表、大修館書店、1986年. Pp.349.

7.　日外アソシエーツ、スポーツ人名事典増補改訂版、日外アソシエーツ、1995年. .Pp.626.

8.　日本オリンピック・アカデミー編、オリンピック事典、プレスギムナチカ、1981年. Pp.820.

9.　スポーツ記録編集委員会、一九九二年版スポーツ記録、教育社、1992年. Pp.1212.

10.　社団法人日本スケート連盟、日本のスケート発達史、ベースボールマガジン社、1981年. Pp.493.

11.　東京女子体育大学学生部所蔵、昭和48年から平成元年「競技会出場成績報告書」、平成3年から6年「各種競技大会成績」

12.　東京女子体育大学後援会所蔵、「学園だより」昭和39年5月号、および　「学園便り」創刊号（昭和41年7月1日）から72号（平成7年12月25日）

13.　財団法人日本オリンピック委員会企画・監修、近代オリンピック100年の歩み、ベースボール・マガジン社、1994年. Pp.461.

14.　財団法人日本オリンピック委員会編、日本オリンピック委員会要覧、財団法人日本オリンピック委員会、1993年.

15.　財団法人日本オリンピック委員会編、ＯＬＹ

MPIAN 4-9 1995年.P.51-55.
16. 財団法人日本体育協会編、第15回オリンピック大会報告書、財団法人日本体育協会、1953年.Pp.672.（含第6回オリンピック冬季大会報告書）
17. 財団法人日本体育協会編、第16回オリンピアード大会報告書、財団法人日本体育協会、1958年.Pp.579.（含第7回オリンピック冬季大会報告書）
18. 財団法人日本体育協会編、第17回オリンピック大会報告書、財団法人日本体育協会、1962年.Pp.636.（含第8回オリンピック冬季大会報告書）
19. 財団法人日本体育協会編、第18回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、1965年.Pp.733.（含第9回冬季オリンピック競技大会報告書）
20. 財団法人日本体育協会編、第19回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、1969年.Pp.730.（含第10回オリンピック冬季競技大会報告書）
21. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第20回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1973年.Pp.428.
22. 第20回オリンピック競技大会日本選手団員名簿、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会.Pp.47.
23. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第21回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1976年.Pp.476.
24. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第22回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1981年.Pp.240.
25. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第23回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1984年.Pp.518.
26. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第24回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1989年.Pp.606.
27 財団法人日本オリンピック委員会編、第25回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会、1993年.Pp.612.
28. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第11回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1972年.Pp.162.
29. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第12回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1976年.Pp.139.
30. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第13回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1980年.Pp.139.
31. 財団法人日本オリンピック委員会編、第14回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会1984年.Pp.146.
32. 財団法人日本オリンピック委員会編、第15回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会1988年.Pp.174.
33. 財団法人日本オリンピック委員会編、第16回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会、1992年.Pp.248.
34. 財団法人日本オリンピック委員会編、第17回オリンピック冬季競技大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会、1994年.Pp.236.
35. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第7回アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1974年.Pp.221.
36. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第8回アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1979年.Pp.350.
37. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委

員会編、第9回アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1983年.Pp.362.
38. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第10回アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1987年.Pp.484.
39. 財団法人日本オリンピック委員会編、第11回アジア競技大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会、1991年.Pp.732.
40. 財団法人日本オリンピック委員会編、第12回アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1995年.Pp.752.
41. 財団法人日本体育協会編、第1回冬季アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、1986年.Pp.104
42. 1965年ユニバーシアード大会日本代表選手団名簿、Pp.32.
43. 財団法人日本体育協会編、1965年夏季／1966年冬季ユニバーシアード大会報告書、財団法人日本体育協会.1966年.Pp.181.
44. 1966 Universiade Winter World Games Japanese Delegation.Pp.13.
45. 1968 Universiade Delegation.Pp.29.
46. 財団法人日本体育協会編、一九六七夏季／一九六八冬季ユニバーシアード大会報告書、財団法人日本体育協会.1968年.Pp.391.
47. 財団法人日本体育協会編、1970年ユニバーシアード競技大会報告書、財団法人日本体育協会.1971年.Pp.174.
48. 財団法人日本体育協会編、1977年ユニバーシアード夏季競技大会報告書、財団法人日本体育協会.1977年.Pp.150.
49. 財団法人日本体育協会編、1979年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本体育協会.1979年.Pp.196.
50. 財団法人日本体育協会編、1981年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本体育協会.1981年.Pp.110.
51. 財団法人日本体育協会編、1981年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本体育協会.1982年.Pp.212.
52. 財団法人日本体育協会編、1983年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本体育協会.1983年.Pp.112.
53. 財団法人日本体育協会編、1983年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本体育協会.1983年.Pp.228.
54. 財団法人日本体育協会編、1985年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本体育協会.1985年.Pp.114.
55. 財団法人日本体育協会編、1985年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本体育協会.1985年.Pp236..
56. 財団法人日本体育協会編、1987年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本体育協会、1987年、Pp112.
57. 財団法人日本体育協会編、1987年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本体育協会、1987年.Pp.250.
58. 財団法人日本体育協会編、1989年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本体育協会.1989年.Pp.140.
59. 財団法人日本オリンピック委員会編、1989年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会.1989年.Pp.159.
60. 財団法人日本オリンピック委員会編、1991年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会.1991年.Pp.138.
61. 財団法人日本オリンピック委員会編、1991年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会.1992年.Pp.240.
62. 財団法人日本オリンピック委員会編、1993年ユニバーシアード冬季大会報告書、財団法人日本オリンピック委員会.1993年.Pp.236.
63. 財団法人日本オリンピック委員会編、1993年ユニバーシアード夏季大会報告書、財団法人日本体育協会.1993年.Pp.236.
64. 財団法人 日本体育協会編、日本アマチュアスポーツ年鑑、ベースボールマガジン社、1978

年から1995年.

65. 財団法人 日本体育協会、日本体育協会七十五年史、財団法人日本体育協会、1986年.Pp.1380.

66. 財団法人 日本体育協会監修、最新スポーツ大事典資料編、大修館書店、1987年.Pp.312.

67. 財団法人日本体育協会編、体協時報、103号（1961年9月）、432号（1989年8月）、450号（1991年2月）、474号（1993年2月）

68. 財団法人日本体操連盟編、体操、51号（1985年7月）から86号（1994年4月）